
その人生期間限定につき

啓至

注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

【小説名】

その人生期間限定につき

【Nコード】

N2055E

【作者名】

啓至

【あらすじ】

自殺、虐め、虐待、殺人、強奪

誰も手を差し伸べない

この世界で僕等は何処にも、誰にも解放されない。だから、壊す力と創る力を

その人生期間限定につき

第一話 僕（前書き）

暗い話なうえに更新は酷く遅い気がして成ませんのでその辺はご理解と御協力のほどをよろしくどうぞ。

その人生期間限定につき

第一話 僕

生まれた意味は何だろう

誰の為に存在するのだろう

そんな取り留めの無いことを思って、僕は屋上へと続く階段を駆け上っていく

足音だけが確かなこの空間で僕はどれだけの月日を無駄に走り抜けて来たんだろう

途方に暮れるような、感傷に浸るような

虚しく、苦しいだけの毎日に誰が僕を僕として認識してくれるんだろう？

親も教師も友達も 一体彼等の何に信じられるものがあるっていうのだろう

駆け上っていく足音が次第に速さを増していく

何も考えられなくなるくらいに、耳の中に息切れと何処か突き放されたような吐息が響いて、耳の中から離れなかった

どうして、なんで、僕は

取り留めの無いことをただ考える

ループしていく思考回路、抜け出す方法は見つからない

一体どこまでいけば僕は僕として認められるのだろう

遠くの方で明かりが見えた。出口は案外近いらしい。僕は最後の階段を駆け上った

タンツと運動靴が床に叩きつけられる乾いた音が聴こえて、瞳い

っぱいに夕日の色が飛び込んで来て、視界を赤く染め上げた

感嘆、とまではいかない声が無意識に漏れる

汗ばんだ身体も、疲れ切って絶え絶えになっていた呼吸のことも忘れて、僕はそのまま前へと前進した

緑色のペンキが剥がれ落ちたフェンスに身を乗り出して、荒い呼吸を整える

そのまま、フェンスの向こう側へと降り立った
数十センチ先のコンクリートの向こう側には何も無い空中がある
だけ

目の前の赤い夕日が沈んでいくのを僕はただ見ているだけだった
次第に僕の足はじりじりと前へ進んでいく

ゆっくと両手を広げてみた

心臓が肌を突き上げる、そのまま柔らかな空気がいっぱい胸の
中へ入って来た

屋上からの景色は全てが赤く染まって見える

もうこの世界に僕は必要ない

いららないんだ

何もかも、紅く染まってしまえばいい

そう

「僕も」

飛び立とうと、その身を投げ出そうとして前へ進んだその時
声が聴こえた

「君は、飛ぶの？」

「・・・え？」

「なら羽がないと 翼無しで飛ぶの？」

振り返ると、一人の少女

いや、少年が首を傾げて僕のことを見ていた

「君は、飛ぶの？」

その顔は天使のような微笑みに満ちていた

「それとも 君は、落ちるの？」

甘いような、辛いような

よく解らない感情が僕の中に渦巻いて声が出なかった。けれど、確実にその少年の声は僕を飛び降りようとしていた期待感と安心感から遠ざけた

どうして、ここに人がいるんだろう？

僕は声にならない疑問を瞳いっぱい溜め込んで、声の出ない驚いてぱくぱくしている口を手で抑えた。このビルの屋上へ続く階段は僕がわざわざ内側から鍵をかけたし、他にこの場所に辿り着けるような階段も無い。こんな廃虚になったビルのエレベーターは動くわけが無いし、まずこんな場所に一人で来るなんてことは普通に考えてありえない。まずこんな人気の無い場所に来るなんてそんなこと

けれど、少年はただ僕を見つめて嬉しそうに微笑んでいるだけ

止めどなく主張を続ける心臓が憎たらしい。僕は上手く呼吸が出来ていなかった。さっきまであんなに紅かった夕日はもう黒く姿を変えつつあった

僕が視線を離れたその時、少年がまた口を開いた

「ねえ、飛ぶの？」

嬉しそうに微笑むその顔はどこか残酷さがあって、あどけない顔

にほんのりと何かよくわからない奇妙な面影を残していた。僕はそれが少し怖くなって、絶え絶えになる息を整えながら、左手でフェンスと掴んだ

「何、言ってるんだ、よ」

切れ切れになる言葉の節々が少し痛い。どうして、こんな女の子のような少年におどおどしなしなければならぬんだろう、僕は

そんなことを考えていると、少年がゆくつりと僕に向かって前進してきた

咄嗟に身体がビクンツと震える。フェンスをつかむ手ががたがたと震え出した

「おお前！くっ、来るなよ！」

いくらそう言ったところで少年の足は止まることがなかった

叫ぶ声が喉の奥に張り付いて、渴いた僕の音には力が無かった

次第に少年との距離は近づいて、フェンス越しにもう数十センチの所まで来ていた

今しかない

ただそれだけ。それだけの衝動が僕自身を突き動かした。今しかない、と思ったから

だから

僕はその瞬間、向こう側へと身を投げた

第二話 等

ぼんやりと向こうの方で笑い声がした気がする

瞼は重くて開かない。僕はどうなったんだろう？不意に襲ってくる疑問は、よく解らない眠気で思考が停止してしまう

空へ身を投げたのに痛くも痒くもない。それに、地面へ落ちた衝撃が無い。今もただ落ちて行くような感覚が身体を支配していた。まだ死んではないようだ。僕は今がっかりしているのか、この状況を悔やんでいるのかよく解らない。自分の気持ちなのに、どうしてだろう

そんなことを思っていると、誰かが僕を揺さぶった

「起きなさい、誠まこと」

全身に電気が走ったような感覚、宙に居るはずの僕はどうして声をかけられているんだ？

誰が僕を呼んでいるの？誰、僕のことを呼んでいるのは誰？

途端、僕の瞼はさっきよりもいとも簡単に開いて、視界が明るくなつた

「え？」

声が無意識に口の端から零れ落ちた。嘘だ、そんなはずはない。

どうして、僕はここに居るんだ？なんで僕は……？

僕は自分の寝室のベットに横になつていた。どうやら朝らしく、僕の母親が僕を起こしにきていた。カーテンの向こう側からは天気がいいのか、日が射し込んで来て僕の部屋の中を明るく照らしていた。開いた口が塞がらなかつた。どうして母さんはここに居るんだろう？夢？現実？でもそんなはずはない。僕はついさっきビルの屋上から飛び下りて自殺したはずなのに

それでも、僕の目の前で母さんは微笑みながらカーテンを横に引きながら僕の方を振り返った

「誠、早くしないと学校に遅れるんじゃないの？」

「ご飯を作って下で待つてるからね。と笑顔で言いながら階段を降りて行く母さんを僕はただ呆然と見ていることしか出来なかった。どうして……」

「どうして世界に母さんが居るんだ？」

呟いた声はあっという間に消えて、部屋の中には一人僕だけが取り残された

綾瀬 誠。今現在で16歳の高校一年生。真っ直ぐな人になって欲しいという母さんの願いで付けられた名前は、真実という『マコト』の意味らしい、というのを昔聞いたことがあった

その『マコト』という願いは一体誰に向けられたものなのかは聞いたことがなく、僕は今でもその意味を知らない。これからもずっとその意味を知ることには無いと思っていた。

母さんは一ヶ月前、交通事故で死んでしまったから

もう、その意味を聞くことは出来ないんだと強く噛み締めたのは

つい昨日のことみたいに思い出すことが出来た

母さんが死んでからの僕は抜け殻のような生活を送っていた。もともと2年前に離婚して母子家庭だった僕の家は母さんと二人暮らし。父さんは一人、僕達と離れた場所で生活していた

周囲の反対を押し切って結婚した僕の母さんと父さんは18歳で僕という息子を授かった

母さんが妊娠したのは17歳の時だったそうだ

まだ学生だった二人にとって、二人だけの力で生活していくことと、僕を育てていくことは難しい問題だった。今考えると、僕が2年後に父親になるだなんて想像もつかないから、三人で生活していくなんてことは絶対に安定したものだとは言えないことくらいは予想がついた。

そんな厳しい生活の中で少しずつ僕が成長するにつれて、お互いの愛情は薄れつつあったのは小さかった僕にも分かっていった。いつから父さんとは別々の食事になったのかさえ解らない。母さんはいつから父さんと一緒に出かけようとしなくなったんだろう。

僕が小学生に上がって高学年になった頃、父さんは浮気をするようになった

知らない人の香水の匂い、馬鹿にならなくなっていくカード明細、家にいる時間なんて塵にもみたなかった。母さんは僕には気付かせないようと笑顔で振る舞っていたけれど、僕はその姿が痛々しくて、見ていられなかった。そんな生活が3年以上続いて、僕は中学生になった

その頃から母さんは僕の居ない場所でお酒を飲むようになった。昔から、お酒もタバコも大嫌いだった母さんが時々、酔いつぶれて帰ってくるのがあった。そのたびに僕は何処かが千切れそうになっていた

そんな生活のなかでも母さんは笑顔だった

自分の身体を壊しても、どんなにつらくても前向きだった。もとも目指していたアパレル関係の仕事で働きたいという夢に向かって、毎日頑張っていた。母さんはその頑張りで会社に勤めて2年もすると、店長、営業専務、社長秘書と出世コースを駆け上って行き、ついに半年前社長になったばかりだった

父さんはそれを僕の口から苦虫を噛み潰したような顔で聞いていた。僕は内心、父さんを憎んでいたのに、その時は何故か可哀想だと思った。

そんな毎日がめまぐるしく過ぎていく時だった

母さんがトラックにはねられたのは

僕は大嫌いな英語の授業中に担任から呼び出されて、淡々と報告を受けた

頭の中が真っ白だった。どう、何を言えばいいのかもわからずに、タクシーに乗せられて搬送先の病院へと連れて行かれた。僕が母さんを見たとき、既に母さんは冷たくなって眼を閉じていた。後から来た父さんは泣いていた。大粒の涙を流して、みっともないと思われるような声で泣きじゃくっていた

僕は泣けなかった。泣くことが出来なかった。

嘘みたいだった。本当はこんなこと夢で、目が覚めたら無かったことになるんじゃないかと思っていた

告別式の時でさえ、そんなことが頭の片隅に過っていた。もしかしたら、と何度も何度も心の中で呟いていた。もしか

母さんが灰になって、家に一人になったことを実感させられたとき、僕は初めて自分のことを孤独だと思った。部屋の中にある仏壇がやけに大きく思えた。学校もすぐに行かなくなって、外にも必要な時以外出ないようになっていった。

そんな時だ、大人達が僕に喰らいついてきたのは。母さんの会社の後釜はあまりに突然母さんが死んでしまったこともあって、僕が決めるという結論になっていたらしく、我こそと思う連中は毎日と言っているほど、家に電話をしてきた。父さんはその後めつきり姿

を現さなくなつたけれど、断絶していた親戚が社長だつた母さんの遺産目当てにハイエナのように僕の方へ寄つて来た。掌を返したように優しくなつていく大人達に僕は距離を取ることしか出来なかつた。電話の回線をぶち抜いて、家の鍵を二重にして、窓もほとんど開けないようになっていた。

その頃からよく考えるようになった。生きてる意味はなんなのだろう、と

今まで母さんによつて支えられてきた僕の平凡は、はたして生きてると言えたのだろうか？

お荷物だっただけなんじゃないのか？今も、昔も僕は生きていく心地がしなかつたんだ

第三話の

僕は、着替えを済ませて階段を降りた。何も変わらない僕の家そのものもだっただけれど、捨てたはずの制服や、ネクタイが僕の部屋にあった

階段を降りると、母さんが僕のことを呼び止めた

「ご飯できてるよ、誠。食べちゃいなさい」

「うん……、ありがとう」

僕のぎこちない返事にきょとんとしながらも、母さんは自分の仕事の準備を進めていた

温かい食事は現実そのもので、さっきまで僕が屋上にいたのが嘘のように感じられた。母さんも本当は生きていて、事故になんてあつてなかつたんだと思えるほどに

僕はどうして屋上にのぼったのかさえ思い出せなくなりそうだった。僕の毎日が掌の中に戻って来たときさえ思い出はじめていた

学校へ行く支度を済ませると、母さんと一緒に家を出て、学校に向かう通学路へと急いだ。別れ際に「いつてらっしゃい」と母さんの声が後ろでした。手を降り返すと、母さんは笑顔で僕を見ていた。僕は死ぬ前に夢でもみているのかもしれない。だとしたらなんて幸せな夢なんだろう。僕はこうして、最高の毎日の夢をみて死ねるなんて

神様にこうも感謝したことはない、と思った

その時、背後で声がした

「飛べた？」

振り返ると、屋上にいた女の子のような少年が僕の後ろに立っていた

僕は一瞬驚きで声が出なかった

「お、お前！どうしてここにいるんだよっ」

訳もなく、僕の身体は震えだした。少年は僕へゆっくり歩み寄って来て、屋上のようなように訳もなく嬉しそうに笑っている

「どう？空を飛んでる気分は、誠くん」

「は？何言ってるんだよ。それに

」

なんでお前は僕の名前知ってるんだ？

「だって君飛べないのに、落ちようとするから」

少年は僕に向かって何事も無かったかのように笑いかける。ここは僕の夢の中じゃないのか？そうじゃなかったとして、どうしてこいつは僕の飛び下りた瞬間を見てるのにこいつも冷静なんだ？どうして

、ここは夢じゃないのか？

「飛ぶとか落ちるとかさつきから何なんだよ一体！僕の中を掻き乱すなよ！」

ありったけの声で叫んだ。喉の奥が焼けたように痛くて、息苦しくなる。目の前の少年は驚いたように瞳を大きく見開いて、かと思ったら少年は何かを見つけたようににんまりとシニカルに笑って、腕組みをした

大きな紅い両目が細く弧を描いた

「そんなに死にたかったの？」

綺麗な声が少年の口から漏れて、僕の中をじゅんずたずたに切り裂いた。死にたかった本当に僕は死んでしまいたかったのに。でも今ここで呼吸をして、立っている。どうしようもないジレンマが僕を切り裂いていく。母さんの顔が頭の隅にちらついて離れないのに……自分で自分を殺してしまいたかったくせに、僕は……

「ふうん、君飛びたいんじゃないんだ。唯単に死にたかっただけなの？」

つまらなそうに言う少年の顔がむかつて、僕は彼の胸ぐらを掴み掛かった

「わっ悪いかよ！僕がそう思ってたんだ！お前があんな所で邪魔しなければ、僕は……！」

飛び下りることができたのに！

どうしようもない気持ちが溢れ出して、僕は声を荒げていた。そうだ、僕は死にたかった。この世の中から消えてしまいたかったんだ。誰に必要とされているのかもわからないで生き存えているなんて嫌なんだよ。生まれた意味も、生きていく意味も知らないままで、呼吸をしているだけなんて。そんなのは死んでいるのと同じだろ。僕はもう生きてない

じゅん
僕が死んでるんだ

その時、僕の手を少年が叩き落とした

両手に痛みが電気のように走って、僕は低い声を出して胸ぐらを掴んでいた手を引つ込めた

「君面白いね」

「は？何言ってるんだよ」

「自殺したい、死んでしまいたい、自分から人生をいのち投げてまでそれ

を成し遂げたいと思ってるのに、この環境を幸せだとさえ思ってる。君の以前の生活では自殺まで結びつかなかった。なのに今では嚴重に人の踏み込まないような場所で自殺をはかる……矛盾してると思わないかい？」

少年の瞳の赤が濃くなったように思えて、僕は眼を刺らせなかった。「君は誰の為に、何の為に死ぬという選択を選んだの？」

「それは……」

全て悪いことから解放されたかった。死んでしまえば何もかも無くなるから。僕が僕でなくてもいいとさえ思った。今楽になれるならどうだってよかった

全部自分の為

でも上手い言葉が見つからない。僕の言葉が足りの無いのだろうか、今少年にどんな言葉で説明しようとしても方法も手段も何一つ思い付かなかった

その時、少年が唐突に僕の目の前に手を差し出して来た

「いいかい、綾瀬 誠。この世界は君の人生だ」

「だから、さつきから意味のわからないことばかり言うなよ」

「でもこの人生は期間限定の期限付、明後日あの太陽が沈めば君は選ばなくちゃいけないなる」

「は？さつきからお前何言ってる？」

「飛ぶのか落ちるのか」

不意に少年が薄くなっていく

空気と同化するように薄れていく

「おい！どこ行くんだよ！？」

「君が落ちるまであと二日ある、それまでに翼を手に入れればいい」少年は笑顔でそう言い残すと、音もなく消えていった

第四話 光

耳の中にいつまでもこだまして僕の中に残ってる
五月蠅い耳鳴りのような、誰かが歌うような

君は選ばなくちゃいけない

僕は少年が消え去ってから、一ヶ月前と変わらない学校への道を
歩き出していた

行かなくなつた学校への不安は何故か何処にも見当たらなかつた
僕の足は不思議にも前へと進む

景色も風景も何もかもいつも通りで、それが余計に僕を安心させて
いた。もう遅刻は覚悟だつたから、半ばやけになつていて僕はゆ
っくりと歩いていった。もう遅刻する時間帯だからか通学路には人
人見当たらなかつた。当たり前か、と心の中で一人呟いてみる。日
頃から車通りも少ないこともあつて、通学路はとても静かだつた。
心の中で呟いたはずなのに、こんなに静かだから誰かに聞かれてし
まうんじゃないかと思つて、僕は後ろを振り返つて誰もいないこと
を確認した。もちろん、誰もいるはずもなく通学路には僕の影が伸
びているだけだつた。

いつも通りなら、友達と通うはしゃぐ声や話し声が聴こえている場
所が今は僕一人。何処か違う場所にでも来てしまつたんじゃないか
と錯覚するほど静まり返っている。

少年に言われた言葉の意味も、何もかもわからなかつた。凶星を
言い当てられて、カツとなつて胸ぐらを掴み掛かつた僕はどうして
あれほどまでも怒つていたんだろう？どうしてあいつは僕のことを
知っていたんだろう？なんで夢の中にまで出てくるんだ？

でも今はそれでさえもどうでもいいと思える。僕は何処か違う誰
かにでもなつたような気がしていた。明後日がくれば、僕はきつと

本当に死んだという意味だったのだろうか？それともこれも夢だから全部曖昧な言葉なのかもしれない。覚めることのない夢で終わりがくるなら、僕はこの幸せを最後まで味わおうじゃないか。

不意に遠くからチャイムの音が聴こえた。その音はどうしても僕の足を駆り立てる。急がなくてはいけないような気分が身体じゅうに溢れ出した。ゆっくりと歩いていた足がだんだんと駆け足になっていく。僕は深く深呼吸をして、鞆を抱え込んで走り出した

閉まっている校門をこじ開けて、中へ入った
もう息切れしている呼吸は整え様がなくて、僕はそのまま駆け込んだ

下駄箱で靴を履き替えて上履きに足を滑り込ませる。僕は遅れを取り戻そうと駆け足で自分の教室へと向かった。階段を駆け上って、

廊下を右へ左へと曲がって行く。ようやく辿り着いた自分の教室の後ろのドアを開けた

「すいません、遅れました」

怖いのか恐ろしいのか、僕は固く眼を閉じていた。誰かの笑い声とか、自分の名前を冗談ぽく呼ぶ奴、担任の呆れたような声がすると期待していた。

「え？」

けれど、瞳を開いて何処を見渡しても、教室には誰一人居なかった。今日は移動教室だったのだろうか？それとも何か集会でもあったのだろうか？拍子抜けしてしまった僕はそのまま教室を飛び出して、思い当たる場所へと走って行った。体育館、講堂、音楽室、美術室

いくらも探して息が切れた頃、僕が見つけたのは誰も居ない空の教室がただそこにあるだけの空間だった

あてもなく探すのに疲れた僕は、職員室のドアを叩いた。きつと誰か先生がいて、僕のクラス日程を知っているだろうと踏んだからだ。コンコン、と軽いノックをして、ドアを開けた

「失礼します、綾瀬ですけど今日」

僕はそこまで言いかけて自分の口を閉じた。職員室に誰も居なかったからだ。おかしい、こんなのは……………。今日は平日。さつきたしかにチャイムの音も聴こえた

なのに

「どうして誰も居ないんだ…………？」

隣のクラスも他の学年も校舎の中には誰一人居なかった。上がっていく呼吸、止まらない耳鳴りのような心音。僕はそのまま学校を飛び出した。

何処か、誰かが居るはずだ。今日学校が休みだったのか、祝日なのかもしれない。僕は学校から一番近くにあるコンビニへと駆け込んだ

「すいません、誰かいませんか？」

自動ドアが開いて、中へ入っても誰も居ない。スーパーも、駅の

改札にも、車両の中にも。道には誰一人として歩いていなかった。
僕が登校したときも誰も歩いていなかった

ここは何処なんだ

僕の知っている町、風景。でも誰もいない。どうしようもない不安が僕を襲った

夕暮れになるにつれて、それはどんどん色を増して、黒くなっていくのがわかる

空は黒ずんで一人の僕を飲み込むんじゃないかと思いつつほどに大きく、広がった

ここは何処なんだ？どうして人がいないんだ？

僕は怖くなつて、家まで全力で走った

遠くの方、僕の家の方が明かりが薄らとついているのが見えた

耳鳴りのような少年の声がまだ残ってる

君は選ばなくちゃいけない

僕は一体何を選ばなくちゃいけないんだろう

どうして此処にいるんだろう

なんで僕は今生きているんだろう

誰の為に存在している？何の為に僕は在る？

速度を増していく景色の中で僕は一人走り続けていた

第五話の

「母さん！」

僕は勢い良く玄関のドアを開け放って中へ駆け込んだ

何も変わっていない家の中、母さんはリビングでテレビを見ながらソファに座っていた

テーブルの上にあるお茶からは白い湯気が出ていた

「誠、おかえり。今日は早かったのね」

「ねえ母さん！ここに、人がついな、くて！それでっ今日学校、が」

僕の話も聞かずに母さんは立ち上がって困ったような顔をした

「どうしたの誠、そんなに慌てて」

そう言っつて、母さんは笑いながら台所へと行ってしまっ

「だか、ら！人がっ」

「もうご飯出来てるから、早く着替えていらっしやい」

いつもの笑顔。優しい声。僕を見るときの瞳の色。よく見たテレビのニュース番組。テーブルの上の夕食。二人分の箸。綺麗に畳まれた洗濯もの。よく掃除された家の中。笑顔。母さん。僕。家。町並み。風景。学校。空。色。今この瞬間。

変わらない、変わってない。でも、だから

だからおかしい

どうして母さんと僕だけがこの町にいるんだろう。どうして誰もいないの。なんで母さんは仕事に行ったはずなのに気が付いてないの。ここは僕の夢だから気が付かないの？それともここは現実なの？夢なの？現実？リアルって一体何なんだ？僕の今、この場所で何が本当でなにが空想でどれが夢なんだ？

わからない、もう何もかも。全部が全部夢なはずなのに。どうし

て僕は……

黙りこくってしまった僕に母さんは心配そうな視線を向けて、声をかけてきた。ハツとして気が付いた僕は彷徨いだす思考を一旦無理やり止めて、母さんの向かい側の椅子に腰掛けた

手を合わせて箸を手にとる。温かい食事は余計に僕の頭の中を掻き回した。どうしていいのかも、なにをしようのかもわからなくて、ただ僕はいつも通りの食事を一ヶ月前と変わらないように食べ続けていた。

にこにこ微笑みかけている母さんは今日のことを一通り僕に話す。一ヶ月前まで、僕の日課にもなっていた母さんの愚痴を聞くのは懐かしいよりも突然気が付いたような驚きに似ていた気がした。隣の人と、今日会社にいく前に話して、少し世間話に合わせるのが疲れたとか、会社で後輩達のもめ事が中々片付かないとか、最近急に老け込んだ気がするとか。終いには僕に

「ねえ、明日学校ないでしょ。一緒に何処か出かけよっか？」

なんて言いながら食べ終えたお皿を下げはじめて、食器を荒いはじめめる。僕の返事も聞かないで、明日は何処に行こうかと勝手に話しながら鼻歌を歌いはじめた

母さんがそんな事を言うのがあまりにも突然すぎて、僕は少し拍子抜けしてしまった。母さんは言い出したり、一度決めるとなかなか説得しづらい頑固なところがあつたのを僕は遠くの方で思い出していた。母さんが食器を洗いはじめたので僕はつられて食べるペーヌを上げ、明日のこともよくわからずに食事を食べ終えてお風呂を済ませると、そのまま母さんに声をかけて自分の部屋へと戻った。階段を上って、部屋のドアをあける。変わらないあの声がまだ耳の中に残っていた。

『君は選ばなくちゃいけないよ』

どうして僕はこんな場所にいるのだろう。死を決意して、ビルの

屋上まで駆け足で上って、フェンスを飛び越えて、両手を広げて……そのまま落ちて逝けたなら、僕はどんなに楽だったんだろう。いまのこの状況も悩ませる現状もなかったかもしれないのに。知らない世界へ飛び立ちたい。何処か遠くへ行つてしまいたい。誰も知らない、僕も知らない、何処か別の場所。ここじゃない場所。

夢でもない、幻想でも空想でもないところへ

連れて行ってほしかった。誰も居ない、母さんもない上辺だけの僕をレッテルだけで見ると奴等と一緒に呼吸をしてる世界なんて、僕を僕として必要としてくれない世界なんていらなかったんだ。そんなの欲しくなかったんだ。僕は、この世界から解放されたかった。母さんが僕を世界と繋ぎ止めてたのに、もうあの人は居なくなつてしまったから。夢のなかでなら、ここでなら、会えるならそれでいいと思つていた。本当に現実じゃなくても幻想でも空想でも、母さんならいいと思つていたんだ。

でも違うんだ

あれは母さんじゃない。僕の夢だ。母さんじゃない、作り物の母さんなんていらぬ。必要ない。僕は、母さんに一つだけ伝えたくて

あの言葉を言いたかっただけなのに。

これが本当の最期なら、偽物の母さんなんて嫌なのに。明後日、僕はもうなくなるんだろう？

僕は電気を消してベットに入ると、布団をかぶつて横になった。

暗闇の中で、いつものように時計の秒針の音だけが聴こえる。瞼を閉じて暫くすると、その音は遠退いて聴こえなくなった。

僕が自分から死のうと思いはじめたのは母さんが死んでしまったから一週間後の夕方、放課後のいつもより早い下校の時だった。いつものように家までの道を歩いていると、ふと向こうの方に高く聳え立つビルが目に入った。いつもの景色と変わらないのに、見慣れない、いつもと違うビルが建っていたから、その時はあんなビルもあるのかとひどく驚いていたのを僕は今でもよく覚えていた。いつもは暗くなってから帰るのに、その日だけは何故かものすごく早い下校で、まだ空が明るいからよく目立っていたこともあったのかもしれない。でもその時何故か僕はむしろに帰りたくなかった。そのまま帰って、また母さんの会社の人や、親戚の知らない人からかかってくる電話のことを考えると、急に足取りは重くなって、僕は歩くのを止めてしまった。何処か暇つぶしでもいいから遠くへ行きたいと強く思ったのがきっかけなのかそうじゃないのか、僕はそのビルに行ってみることにした。

少し歩いていくと、目的の高いビルまで簡単に來ることが出来た。行く先々では人通りもすくなく、ビルの周りには誰も居なかったこともあって、中に入るのは容易かった。

入った途端にほこりっぽい匂いが鼻を突いた

グチャグチャに置かれたカートに、何か商品を置く棚がバラバラになって床に鏝められている。ここはなにか大型のショッピングセンターにでもなる予定だったのだろう。それらしい看板や、ビルに

張り付いていたチラシからそのようなことは伺えた。そういえば僕がとても小さかった頃、母さんが「この辺りにも大きなシヨッピングセンターが出来るのよ」なんて話していた気がする。けれど、途中でその会社自体が潰れて、作業が中止になったというはり紙が最近家にも届いていたのを思い出した。申し訳ございませんでしたという文字が妙に印象的だったのをよく覚えている。きっと取り壊すお金の予算もないのだろう。放置されていたこともあって、自動ドアもエレベーターも全て止まっていた廃虚のビルは、落書きの王国と化していた。誰かの自己主張なのだろうか、それともなにかのサインなのだろうか。僕には意味がわからなかったけれど、きっとその人にとって意味のあるものであるう絵がスプレーで綺麗に描かれている。端の方には思い思いに書かれた名前や、合い言葉、何かの誓いのようなものから恋人同士の名前まで刻まれていた。僕は一通り一階からあちこちを見渡して、階段を使って、随分と高い所まで来ていた。次第に高さを増して行くにつれて、落書きも少なくなっていく。当たり前か、と僕は階段を上りながら独りごちた。エレベーターも止まったこのビルでわざわざ重たい荷物を持って上に上って落書きをしたいと思う人自体少ない気がするし、実際僕なら上にきてまで絵を描こうとは思えない。

た。

そこで初めて見たのは一枚の絵だった

『光』がそこに在った

第六話 中

最上階の狭い部屋のような場所には、一枚の絵が飾られていた。そこに光りが在るような綺麗、というには儂く、美しい絵だった。僕は一瞬それが絵であるということを忘れて、魅入ってしまった。光が在るような色使いに細く描かれた優しい線は一つの世界を作り上げて行く。そこには青いというには蒼すぎる空が描かれていた。

時が経つのも忘れて、僕は絵を見続けていた。どうやらこの部屋は倉庫代わりだったらしく、段ボールが山々と積み上げられていて、誰も訪れたことの無さそうな

人のいた気配がなかった

生活感がまるでない。他の階はそれとなく人の居た感じはしたのに。

絵から視線を離れた僕は、絵の真下の床に一冊の古びたノートがあるのを見つけた。もうそのノートの紙は茶色く変色して、角の部分はボロボロだった。僕はそれを手に取って、パラパラとページをめくってみた。

中には誰かの想いが綴ってあった

明日のない歌を唄う

空の色は一体僕に何を言いたくてあんなに悲しい紅色をしてるんだろう

世界はこんなに空虚で無色なのに

どうして僕は生まれて来たんだろう

なんで呼吸をしているんだろう

明日のこともしないくせに

今どうして存在しているの

誰かの糧にもなれないで、僕は僕でいられるの
必要とされないのなら

僕を僕として誰も見てくれないのなら

ここで朽ちて光になろう

明日もない歌を唄って

僕がいつか誰かの心に残るまで

僕は、その一冊のノートを持っていた腕が少し震えた

僕の思っていたことを写し取ったような言葉の羅列。その類い

日記のように綴られていたその言葉たちは果てなく色を僕の中に
残していく

僕は一冊のノートを手にしたまま、そのビルかたら立ち去った

またここに来るなんてそのときは考えもしなかったけれど

光に出逢えたことに後悔も歓喜もなかった

ただ、僕は自分の生き方を見つめ返したかったただけだったのかも
しれない

僕は家へつくとまず留守電の確認と、ポスト、扉と家周辺に変なモノがないかを確認した

よくある話が盗聴器の類いが無いか調べていたのだ。最近気が付いたのだけれど、僕は思ったよりも大人達の眼の下にいるらしい。金で人が動くなんて、世界は思っていたよりも簡単に人の力で心が変わられるということを実感させられた。悲しいかな、こんなことを毎日目にするのは。

でももう悲しさも寂しさもない。現実には恐ろしい。慣れてしまえば、それが恰も本当のように思えてきてしまう。全部が全部そうじゃないはずなのを知っているのに。

僕がそれに気が付いてからは、もう誰も家にあげないし、連絡も取り合っていない。それが一番いいと僕は思った。

鍵を閉めて、階段を上る。母さんが死んでしまってから一度も掃除したことがない部屋は散らかっていて汚い。洗わずに置かれている食器は一ヶ月前の物と何の変わりもない。片づけをしたくないなんていうのはただの建て前で、

本当は母さんがいたままを残したくて、僕は何も手を付けられないでいた。

洗濯物も、食器も、部屋の中に干されたままになっているタオルケットも、コンセントが出しっ放しになったままの掃除機も

全部、一ヶ月前までのままで止まっている

僕だけが一ヶ月前のあの日から動けないみたいに、そのまま、何がぼつかりと抜け落ちたように欠落しているみたいに思えた。

僕は自分の部屋のドアを開けて中に入った。最低限の家具しかない僕の部屋は殺風景でこれといって何も無かったけれど、もうご飯

も食べる気になれなかった僕は、そのまま制服のネクタイをはずして、ベットにうつ伏せに倒れ込んだ

右手には、さっきビルの最上階で見つけたノートが握られている。何の変哲もない、ただのノートだ。表にはクラスと学年、名前までは書かれていなかったけれど、裏には使い終わりの日にちが書かれていた。文字はあまりにもこのノートが古い所為か、上手く読めない。僕はそのノートの主が書いたであろう文字を口でなぞってみた
「7月7日」

きつとこのノートの持ち主がああ絵を書いたんだろう。僕はそう思いながら、最上階にあつた絵のことを思い出していた。光がそこにあるようなあの空の色。手を伸ばせば、向こう側まで届いて、貫いていけそうなくらい澄んだ空の色だった。あんな絵を描く人がいるのか、と素直に驚いていた。僕は正直、偉い人たちが買うような訳の解らないぐちゃぐちゃの絵の具を垂らしただけのような絵は全く、というかさっぱり意味がわからない。

芸術のセンスがないと言われればそれまでなのかもしれないけれど、わからないものは解らないのだ。でも、あの絵は素直に何故か、僕の心に響いた。

真つ直ぐに空を見たいと思ったんだ
僕は最初の1ページに手をかけてみた

そのノートは持ち主の日記だった

誰に宛てたのかもわからない詩や
書きなぐったような、それでも繊細な絵も
その人の心も全てその中に描かれていた

第七話 心

そのノートの持ち主は多分僕の通う高校へと通っていたらしく、今現在も僕の高校で美術の先生を勤めている名前がちよくちよく出て来ていた。近所にあるスーパーの名前も、この近くの住民ならだれでも最寄り駅にしている駅名も全部そのまま、僕は持ち主と同じような環境にいるんだということが、すぐにわかるくらいに。

書かれていたことは何も変わらない、僕が日記をつけていても書きそうな、そんな類いのことだった

少し違っていたのは、その人には文章と絵の才能があったってことだけ

ただそれだけだった

その人が日記を付けはじめたのは、使い終わりの7月7日から三ヶ月前の4月7日

書き出しはこんな言葉で始まっていた

『今日は、とても良い場所を見つけた

高いビル

の最上階！誰もいなくて、とても良い場所だ。気軽に絵がかけられるし、なにより静かで、気がとつても休まる！それで、今日からそこを僕の秘密の場所にすることにした！明日から毎日通って、たくさん絵を描こうかな』

そして、そのページには最上階の窓から見える景色が描かれていた
黒い鉛筆で書かれているくせに、僕にはとても綺麗な夕日の色が
見える気がした

そんな日記は次第に詩が綴られるようになった

日に日に量も増えて、絵もどんどん上手くなっていった

妹の運動会、保護者と担任での三者面談、母の日の贈り物、その人の好きな誰かのこと

楽しそうな日常がその人を包み込んで

その紙一枚でその人の笑顔が想像できるくらいに

でも、ある日突然、笑顔が消えた

その人は何か重い「病」にかかったらしい

文字も震え出して、つい1ページ前の文字とは比べ物にならないくらい情けないような、何かとても良く解らない感情が押し出されたような文字だった

『もう、僕には時間が残されていないらしい』

そんな出だしで、その日の日記は書かれた

『今日、たまたま接触事故にあつた友達の付き添いで病院に行った。そのときはまさか僕が逆に診断されるなんて思ってた。けれど、どうしようもない結果を突き付けられた。声が出なかった。母さんも父さんも何も言ってはくれなかった』

『僕は一体どうして生まれて、生きているんだ

らう』

理由が判らない

その人がその一言を書いたのは、6月7日

この日記の使い終わりの一ヶ月前だった

『もう理由がわからない。僕はどうしたい？死んでしまいたいのに、

もう僕は自分で死を選ばなくても、死は僕にやってくる。余命は』

あと一ヶ月

『少ない、と言えば少ないのに、多い、と言えば多い。中途半端すぎて、何をしたらいいのかもわからない。僕はどうしてこんなことも決められないんだろう。もうすぐ時間が底をつくのに、何も自分で判断できない。でも、延命治療なんて受けたくない。僕は最期まで僕でいちゃいけないの？』

あと一ヶ月

『僕が僕として何かを考えることが、話すことが、動くことが、もしもできなくなるんなら、それは死んでいるのと変わらないよ。母さん。僕は、そうまでして、僕を壊してまで生きていたくななんてない』

だったらいつそのこと殺してくれたほうがいいんだ

『もし、この治療を本当に受けさせたいなんて考えてるなら』

僕はもう世界なんてイラナイ

もしも、僕が僕でなくなるのなら、もうこの時間はいらさないよ
砂時計みたいになくなっていく時間でも、僕は自分で絵を描いて、
誰かの中で生きていたいから

『僕は最期まで僕でいちゃいけないの？』

彼は、7月7日の前日にこんな詩を残している
僕は、読んでいる最中にどうしてか涙が出た
選ぶことをした彼がとても輝いて思えたんだ
その決断が光に思えたんだ

『立ち上がる

前を見て深く息を吸う

瞬る雛鳥は高くは飛べず、ただ呼応する大地に根をはるように呼
吸するだけ

それだけ

何を待っているのかそれとも待たずに飛び立とうと言うのか
誰を待って何を思うのか

知っているのは空だけできつとだれも振り向こうとはしなくて
知ろうともせず毎日をいきて世界は廻って僕等はただ息を吸う
そう、あの雛鳥と同じようにただ生きるがために息を吸う

なんの思いも感情も無く仰ぐ宇宙を彼等はどうして駆けるように
舞うのだろう

手を延ばしてもそれは届かないくらいに遠くて

鮮やかな想いがそこにあつた

遠く

果ても無かつたあのころよりも遠くに

見落とせば気が付かないほどに

舞う

枯れることなく流れ続けるあの雲のように広いキャンパスにえの
ぐをたらすように

空に彼等は想いを綴っては叫んで

夜明けの唄を歌ってはただ純粹に走り続けた
そう、だから
見えない物も見えてた、気がした

もう遅い、世界の果てで僕は一体誰の心に残れるだろう

そんなことを考えて上を向いた
もう終わる

何かが変らなかったとしても、僕は僕である限り
誰かのために光でいたいと思うから
だから

両手を広げて、一歩前へ踏み出す
世界はゆつくりと僕の中で弾けて

消える』

そのノートの持ち主は、自分の意識がなくなると宣告され、
その自分が自分でなくなってしまう最終日に病室を飛び出して失
踪した

発見されたのは近くの工事が途中で中断していたビルの付近
その失踪した高校生の少年が飛び下り自殺を図ったということは、
十年前からこの辺りではよく聞く噂話だとばかり僕は思っていた
まさか、このノートがその人の日記だったなんて
僕は日記を持ったまま、その場で踞って

独り泣いた

嗚咽に近い声が喉の奥で疼く。誰も居ないのに、僕は息を殺して、

その人生期間限定につき

顔を枕に押し付けていた

涙が出たのは、その人が不幸だったとか、可哀想だったとかじゃなくて

そうじゃなくて

ただ、決断できない僕が悔しかったんだ

第八話 世

研ぎ澄まされた意識の中で、僕は眼を覚ました

知らない間に眠っていたようだ。もう朝になっている

珍しいな、こんな一ヶ月前の夢を見るなんて。あの、僕が自殺しようと思ったあの日をなぞつみたい。まるで映画館でモノクロ映画を独りで見終わった気分だ

あれから少しずつ変わった。僕も、世界も。僕は自分で自分を終わらせたいと思うようになったし、死んで、あのノートの持ち主のように輝きたいと思った。もうこんな酷く荒んだ世界で呼吸をするのに意味もないと思えたから。すぐに学校も行かなくなって、それで

あまり記憶がない。いろんなことがありすぎて頭の中が壊れていく感覚。もう僕じゃなくなっていく感覚。世界がどんどん僕を追い抜いて色褪せていく感覚。

もう、僕は僕じゃないのかもしれない。

そう思った途端に母さんの声がした

「誠ー！もう起きなさい、今日出かけるんでしょー！」

少しドキツとして、身体の動きが一瞬止まった。

なんで死んだ母さんの声が聞こえるの？

でもすぐにここが夢物語の世界だったっていうことを思い出して、我に帰る。そうだ、この夢には母さんと僕しかいないんだ。忘れかけていた『今』の現実を思い出して溜息をついた。空想なのだろうかこの世界は、それとも何か、もっと別の………

僕はそれ以上考える気になれなくて、服を着替えて、階段を降りた。母さんは休日の格好に化粧をして、僕にはようと言いなながら朝食の準備をしていた

母さんに連れ出されて向かった先はいつもお盆の時に二人で行っていたお墓。でも俺はこの墓の中に誰が眠っているか知らなかった。けれど、母さんの大事な人だって事は嫌でもわかる

だって、いつも手を合わせている時の母さんの横顔は真剣なんだいつもみたいに笑ってない。ただ、本当に祈るだけのために存在しているようにも見えるくらい。僕にはよく理解できなかったけれど、この墓が誰のものかなんて聞く気にもなれなかったし、聞くつもりもなかった。母さんが大事にしていた人ってことに変わりはないと思ったから。

「ごめんね、せつかくお休みなのにこんな場所で」
そういいながら、母さんは僕に向かって困ったようにへらへらと笑った。少し胸が痛い。もうそんな顔で笑わないでよ。

「別に、いいよ、何処でも」
だって母さん、この夢には僕と母さんしかいないんだよ。僕達が電車に乗ってる間も、駅を出て歩いてからも、お寺に来てからも誰も会ってないでしょ？いつも出かける時に嫌でも顔を合わせてくる隣に住んでるおばさんも今日は見なかったじゃないか。それに、もう死んでしまった母さんがそんなこと言わなくていいよ。

気を使わないでよ、こんな僕にまで
飛び下りて自殺しようとした、命を、母さんがくれた僕の命を捨てようとしたこんな

こんな汚い僕にまで

そう思った僕は、母さんが持っていたシャクとバケツを「持つよ」と言っ、先を歩き出した。顔を見られなくなかったのもあるのかもしれない。僕は今誰かと面と向かって話せるほど余裕が無かったから。

正直、上手く言えなかった。今この夢の中の母さんに何を言っても伝わるどうか解らない。もしかしたら、言った瞬間にこの世界ごとなくなってしまうんじゃないかって少し怖い気もした。消えて欲しくなかった。もしあの変な少年の言ったことが本当なら、僕は明日、この世界から消えるのかもしれない。きっと選ぶっていう言葉の意味はそういう事だ。なんとなく解る気がして、僕は溜息を噛み殺した。それまで、嘘でもいい、母さんと最期まで一緒にいらればいいと思う。きっと、それが最期の罪滅やむじゆほしなのかもしれない。

その時、母さんが僕の後ろに居なかったことに気が付いた。どうしたんだろう？僕は振り返って、さっき手を合わせた墓のほうを見た。母さんはまだその前に立ち尽くしている。僕は駆け寄って声をかけようと思っ、足下にシャクとバケツを置いて母さんの方へ駆け足で寄って行った

「どうかしたの？」

もうすぐ日がくれちゃうよ、母さん

僕がそう言おうとした瞬間、母さんの口が音もなく開いた
瞳には大粒の涙が溜まっていた

「ごめんね、誠」

「え？何、どうしたの」

僕が声を発しても、何も言っはくれなくて

母さんはそのまま僕のこと抱き締めて一人で泣きじゃくった

泣いて、泣いて、もうどのくらい時間がたったんだろう

日はもうとつくに暮れて、空の色はもう黒ずんでいて、夕日の色が確認出来ないほど霞んで見えた

随分長い時間が流れた頃、母さんは僕としっかり向き直って、自分の両手で涙を拭いた

「あのね、誠にまだ言えなかったことがあるの」

そして、信じられないような言葉を囁くように俺の耳の中へ落とし

「本当はあたし、誠のお母さんじゃないのよ」

第九話 界

鼓動がゆっくり、僕の中を駆け巡って心臓まで戻って来た

頭が真っ白で、何も考えられないほどに何も無い

僕は今、何て言われたんだろう

意味がわからない。今、僕は、何てイワレタノ？

『本当のお母さんじゃないのよ』

目の前で泣いているこの女の人は今、僕に？

繰り返される、リフレインする思考の中ではっきりと母さん

いや、目の前の女の人の声がした。まだその声には涙が霞んで聴こえた。けれど、すっかり僕を見てた

瞳の力に迷いはなかったのが余計に僕を何処かに突き落とした
「ごめんなさい誠、でもお母さんは、そりゃ血が繋がってるわけじゃないから・・・正式な家族の関係があるとは言えないけど・・・
・・・あなたの母親だから」

今まで育ててきて、でもお父さんと離れてもあなたの育児を投げ出そうって考えたことはなかったの。お父さんにもう愛情がなくても、自分の子供じゃなくても、誠のことは愛してるわよ。ずっと、隠してきたごめんなさい。そこまで言うてから、母さんは頭を下げた
何言ってるんだろう、この人は。何の変哲もない疑問が渦巻きだすのに、僕はただ呆然と立ち尽くしているだけだった。何もできないで、そのまま。

暫くして、僕が続きを促さなくても母さんは説明を始めた。状況が上手く飲み込めない僕には有り難い話だったのかもしれないけど、聞きたくなかった。言わないで欲しかった、なのに、口が動かない。『止めてくれ』って一言言えばこの人はきくと納得して、僕の言ったことを受け入れてくれると思う。けれど、思ったように声が出な

い。上手く口が動かない。言わないで、そんな説明いらないから、もうこれ以上

本当は聞きたくない

「こんな日にこんなこと言うのもおかしいと思うんだけど、誠ももう高校生だし・・・お母さんがもっと早く言えば良かったんだけどお父さんと話し合って、もう少し待ってみようって」

言わないでくれ、もう何も聞きたくないから。そう思うくせに、僕は上手く伝えられないでそのまま俯いた

「それで、なんなの」

こんな言葉しか言い出せない自分の口が憎らしくてしかたなかった。おどおどとした声がすぐに耳に届くのには、もうなんの反応も返したくない。今僕はどうしたら一番いいのかわからないのに、もうこれ以上解らないことを増やさないでくれ

「あ、あのね、誠。混乱する気持ちもわかるけど、誠のお母さんはもう亡くなってるの。あなたを産んだ時に・・・」

僕が聞かされていた周囲の反対を押し切って結婚したというのは実の僕の母親だったらしい。そして僕が生まれたと同時に亡くなって、すぐに今の母さんと父さんは一緒になった。父さんと母さんは僕に本当のことを言えなくてここまで引っ張ってきたわけだ。

なんだか酷く裏切られた気分だ、もう何も言わなくていいから僕の前から消えてよ、

「だったらなんでそういうこともっと早く言わないの？」

「え？」

僕は真っ直ぐに母さんを見ていた。きっとその瞬間の目つきは相当酷かったと思う。あんな驚いた母さんは、今まで見たことが無かったから

「ま、誠？」

「嘘ついてたんでしょ、ずっと、僕に」

そんなわけじゃない、という無言の訴えが僕の瞳に突き刺さる。悲しそうな両瞳が僕のことを映してた

「そういうことじゃないか、だったらどうしてもっと早く伝えようとかしなかったの？」

「それは・・・っ！」

口を開きかけた母さんの声を上から覆いかぶさるようになしてかき消した

「他に方法はいくらでもあったんじゃないの？それに、伝え方も。粗方この墓は僕の本当の母さんの墓で、あんたは懺悔しにここに毎回僕を連れて来てたわけだ」

その瞬間、僕の頬を思い切り叩く音がした。同時に頬に激痛が走って、半開きになっていた口の中が血の味に染まった。ハツとしたような母さんの顔が、ゆるゆると自己嫌悪しているような顔に変わっていく。きつと僕に手をあげるつもりなんてなかったんだろう。高ぶった感情を堪え切れなくなって、僕にそのままぶつけたんだ。別に説明されなくても解る。冷めたような気分が僕の中に蔓延した。大人だって子供と変わらない。嫌なことを言われれば仕返ししたくなるし、融通が利かなくなれば機嫌が悪くなる。全部理屈っぽいだけで、結局根本的な所はなに変わらないんだ。機嫌が悪くなれば人に当たるし、何か不都合があれば自分より立場の低い子供に当たって。最悪だ。そんなの。

僕の口から少量の血が流れる。きつと頬は腫れてるのかもしれない。僕がそつと頬を触った途端、ごめんなさいという声が聞こえた。「でもっあの、お母さん、そんなつもりじゃなくて、誠のことを傷つけたくなって、それで・・・」

もうどうでもよかった。何も言わなくてよかった

「もう、いいよ。そんな死んでから言われたって困るから」

「え？」

僕は無意識のうちに駆け出していた。気が付くと、随分と後ろの方で声がした。でも振り返らなかった

「誠！」

誰もいなくてよかった、この世界ではあの人から逃げ切れれば僕は
はずっと独りでいられる

一人でいられる

駆け出した足は止まらなかった。ただ、全速力で走り出してた
行く当てなんて何もなかった。何処にもなかったそんな場所
でも今自分の瞳から流れ出しているものが本当は嘘だって思った
かったんだ

痛いって

助けてって

心の何処かが叫んでた

第十話 色

一体、僕は何処まで走ったんだろう

走って走って、もう自分がどのくらいの間ごうしていたのか忘れるほど、僕の足は止まらなかった

もしかしたら、もう明日になっているのかもしれない

そんな事を考えるよりはやく日はとくに落ちて、もう月が昇り切っていた

絵に描いたような満月だった

もう 声も出ない

本当は僕は母さんの息子じゃなかった。父さんはそれを知って、それでも母さんに僕のことを頼んだ

無責任じゃないか、そんなの。結局二人とも、自分が悪者になるのが嫌だったんだ。僕に批難されるのも、後からいろいろ詮索されるのも

そこまで考えたとき、不意に目の前に人影が見えた
少し驚いた

こんな夜だったから、尚更だったのかもしれない

「ねえ 誠くん、もうすぐタイムリミットだよ？」

ドキリ、と心臓が跳ね上がった

「また、お前か」

僕の目の前には少年がにこやかな笑みを浮かべて立っていた
片方の手をひらひらと振りながら

「今日の零時になったら、って話だったな」

「よく覚えてるね誠くん、さすが」

少年はニコニコと笑いながらへらへらと回って、そのまま僕に背を向けた

「君が何処で終わりを迎えようと勝手だから、もう僕は何も言わないね」

訳の解らない少年の言葉は僕の耳を流れていく

僕が少年に向き直ろうとした時、不意に薄らと何かが目の前を覆うような感覚がした

そういえば、母さんはどうなるんだろう

聞こうとした僕が口を開いた瞬間に少年の瞳と視線がぶつかった
「何？裏切られたって勝手に喚いてたくせに、まだそんな心配できる余裕なんてあったの？」

「・・・っ！」

見透かされたような瞳に、僕はいてもたつてもいられなくなって、視線を外した

畳み掛けるように少年はシニカルな笑みを浮かべる

地面のコンクリートを手らず月明かりがいつもよりも眩しく感じた
「誠くんそーとーなマザコンなわけ？違うでしょ。だって本当は君、

「うっ五月蠅いんだよ！それ以上何も言うな！！」

僕は、自分の心を先に少年に言われてしまうのが嫌で、声を荒げた息がぜえぜえと畝って、そのまま喉の中を支配していく

呼吸が荒い。耳鳴りが酷くて、僕はもうその場にへたり込んでしまいたいほどに疲れ切っていた

「本当のことでしょ？今更隠しても意味ないよ」

それに、僕に隠しても意味無いよ？

「誠くんが自殺したいと思った本当の理由は、もう自分の母親だと思ってた人に裏切られたって、あの人が死ぬ前から解ってたからじゃないの？」

お母さんが

「っ！」

「そうでしょ、大方お父さんにでも説明されたんだ？」

「な、んで・・・そんなことお前がっ」

「僕？ 僕は何でも無いけど、誠くんのご事は少し知ってただけだよ」

別に興味の欠片も無いけど

と言いながら、少年はクスクス笑った

痛いくらいに少年の冷たい視線が、僕の瞳の中に突き刺さった

声も出ないまま、僕は反論も何もできずに立ち尽くしていた

凶星を突かれたことに 何か感じた訳でもなくて、
ただ少年に射抜かれたような感覚を覚えたからだった

お前は どうして そんな enough 選択 choice ことしかできないの？

まるでそう言われたみたいに

僕の心臓をまるごとつかまれたような

そんな気がした

「だ、から……なんなんだよ」

切れ切れの声で出した言葉はこの程度だった

少年に　きつとこの言葉は届かないだろう

だって、この言葉はただ少年に言われたことに対しての言い訳の
ようなもので、

僕の意味も、考えも、思いも

なにも詰まっていなかったのガラクタだから

カラッポの言葉をぶつけられたって、きつとどろってことない

そんなこと　僕が一番わかってた

なのに……

そこまで思って俯いたとき、少年の声が耳元を掠めた

「君が望んでいることは本当なの？ってことだよ」

言われた意味を理解するまでに時間がかかって、僕は上手く空気を
吸うことができなかった

僕の望んでいること、

それは、考えただけで言えるようなものじゃなくて

ぐちゃぐちゃにからまった心臓にただ埋もれているだけだったから

言えそうにないものを言えるような元気もなくて、僕はそのまま

黙り込んでしまった

ただ、僕は自分で見つけたかったただけなんだ。きつと

「世界はまだ殺すことができるって？」

少年に、言葉の続きを言い当てられてハツとした
少し驚いた

その時の少年の笑顔は、今までに見た事がないくらいに
酷く優しいものだったから

「うん、僕は知ってた。自分の母親が母さんじゃないこと」
驚くくらいに、僕の口はいとも簡単に開いた

躊躇ためらいも、躊躇ためらもなく

ただひたすらに目の前の少年に向かって

「父さんが母さんが事故に遭う一ヶ月前の晩に僕に話した」

その日は僕の誕生日で、

母さんはごちそうを作ってた

父さんの帰りはいつもより早くて

3人で食事をして

僕はどうしてか こんなことが一生、普通に僕の隣に居座り続け
るんだと思ってた

心の隅でそう願ってた

なのに、父さんは僕に全部話した

「真っ暗になった 気分だった、」

もう僕は、なにもかもが全部信じられないと思った

勝手な話かもしれない

だって僕は、散々母さんに育ててきてもらったのに

本当の母親なんかじゃなくてよかった

僕を見てくれてるのは痛いほど知ってた
解ってた

だんだん会話は減ったけど、母さんとはちゃんと解り合えてるって家族だっと思ってたから

でも、父さんとの話が嫌なくらいに耳の中に残ってて

「裏切られたような気持ちになっただんだ」

全部が全部世界から

僕の存在も理由も全部 全て

いらないうって投げ出されたように感じて、

「母さんを憎むことでしか、晴せなかった」

汚い気持ちを僕の中だけじゃ受け入れられなかった

本当は後悔してた

次の日の朝から、わざと早起きをして

母さんと顔を合わさずに学校に行った

そのほうが父さんともギクシヤクしないので済むって勝手に自己完結させて

そのまま早足で家を出た

学校で、血相を変えて先生が僕の名前を呼ぶまで

僕はその日どうやって母さんと父さんに会わないで済むのかを考えた

もっと、なにか出来たのに

「本当は、あの日いってらっしゃいって言ってあげればよかった。

朝御飯を食べてあげればよかった。もっと、出来た。なにかもっと

しゃくりあげながら出る声が虚しく響くように頭の中を通過した瞳の中に何かが溢れて、僕は上手く声を出す事が出来なかった。

「もう僕は、自分を殺してしまうことではしか許せなかった」

自分のことを

世界のことを

許す事ができなかった

僕は知ってた

人間には 人には 取り返しのつかない時もあるってことを
よくわかってた

「なのに、」

自分が一番嫌いなくせに自分のことを最初に守った

死んでしまえば良いって思うのに、最後にはしっかりと自分の場所
だけ抱えてた

弱いくせに

僕のこと重荷で、ずっと僕の事真っ直ぐ育ててきた母さんのほう
がずっと強い

だから、僕は言えなかった

本当の母親じゃなくても、僕は家族だって思ってるって
伝えてあげれば良かったのに
できなかった

「何も出来なかった・・・」

涙がただ、僕の頬に流れてた

目の前の困ったように笑う少年の顔が見えないほど
目の前が霞んで見えた

不意に少年が僕に近づいて、片手をひらひらさせた

「わかった、君の望んだこと」

「？」

「もうすぐタイムリミットなんだ。誠くんがしたいようにすればいい」

選択肢は君にあるんだよ、誠くん

そこまで言うてから、少年は音もなく消えた

目の前には、いつかの日記を拾った

僕が自殺しようとしたあのビルが建っていた

最終話 彩

無意識に僕は階段を駆けのぼっていた理由とか、そんなものはよくわからないただ、駆け出したい衝動が僕を突き動かしたただのかもしれない階段を駆けのぼる僕の足音だけが反響して、静まり返るビルの中に響いた

もうどうだってよかった

ただ、足が動いた

ドクドクと流れる脈が、耳元まで聴こえるようになった頃、僕はいつかの屋上に辿り着いていた

息切れした呼吸をゆっくりと戻す

その時はじめて気がついた

月明かりの中に、母さんが僕を見て立っていた

「ど、うして……？」

途切れ途切れになる声を紡いでも、戸惑いは隠しきれなかったなんで母さんがここにいるんだ、この場所は

僕が自殺しようとした場所

命を投げ出そうと決めた場所

もう二度と、ここに帰ることは無いと思っていた
最期の場所だったのに

目の前にいる母さんは、ゆっくりと僕に近づいて、笑った

「誠がどう思っても、誠は母さんの息子だから」

「何言ってるの、母さん？」

「もう、母さんは戻ってこれないから。だから、誠は父さんと一緒に二人で……」

「母さん？母さんっ？」

「もう大丈夫、だから。誠が抱え込むことなんて何も無い、の」「返事してよ！母さん！」

「ごめんね、誠」

「っ！」

俺が話し掛けようとした瞬間に、母さんの身体が前に倒れた呼び掛けても反応が無い

それどころか、母さんの瞳は僕を写していなかった

耳は、聴こえているのかもわからない

喋り続ける母さんの口の動きは止まらない

身体がやけに冷たかった

それでも、母さんは何か喋り続けてた

声は、その口から出てなかったけれど

「もう、話さなくていいよ！母さん！」

どんどん冷たくなってく

僕の手であたためても全然温かくなならない

だめだ、もう

「母さん、死なないで……っ！まだ、だめだ、こんなの！」

僕、まだ何も言っていないじゃないか

独りで全部話して先に逝っちゃうなんて狡いよ、

「狡いよ、母さん 僕、母さんが本当の母さんじゃなくてもよかつたのに！」

ずっと、傍にいたじゃないか

なんで、僕を置いていくの

家族だよ、血なんか別にどうだっていいよ
関係ないよ

僕が気にしてた訳ないじゃないか
だから、もうどっかいかないでよ

「母さん、」

僕が呼んだ時、母さんは笑ってた

「ありがとう」

それだけ、最期に聴こえた母さんの言葉

その瞬間、母さんの姿は消えていた

僕は無意識に呟いた

ありがとう、

溢れ出した涙は、止まることなく流れ続けた

気が付くと、僕の後ろには、少年が立っていた

「時間がきたよ、誠くん」

いつものシニカルな笑顔で、少年は笑った
人を馬鹿にしたような顔は、真っ直ぐに僕を見てただそう言った

「母さんに、僕の想いは伝わってた？」

少し驚いたような少年の顔を見ながら、僕はそれだけ言った
少しだけ、ほっとしていた

母さんの荷が少しでも軽くなっていったならそれでよかった
最期に笑った顔が見れてよかった

最期の言葉が、あたたかいものでよかった

僕の涙を見ながら、少年は微笑んだ

その顔は少しだけ、母さんを思わせる

「最期に笑ってたでしょ。誠くんが思ってることは、あの人も思っ
てたことなんじゃない？」

「そう、かな」

戸惑いながら言った僕の返事に、少年は不思議そうな顔をしてから
「そつだよ」

親子でしょ？

と、言って笑った

少年の顔は、とても優しかった

これで、もう何も無い

思い残すことも、言葉も何もかも

僕は深く深呼吸をして、少年に向き直った

「それで、僕はこれからどうなるの？」

多分、というかわわなくても僕が死んでしまうことは確実だった
屋上から身を投げたのだ

それに、このビルはうんと高い

落ちて生きていられる確率なんて、常識じゃありえなかった
僕の言葉に、少年が笑ってこたえた

「それはさ、誠くんが選ぶんだよ！」

「え？」

少年が、不意に親指と人さし指をパチンと鳴らした

途端、目の前が暗闇に染まる

「ちよっ！なんだよこれっ！？」

身体が落ちていくような感覚

吹き上げられる下からの風は、屋上から飛び下りた時に酷似して
いた

落ちる

その言葉は、死ぬという意味を持って、僕の中に存在していた

このまま落ちて、終わるのか？僕は、

何もしていない、そのまま

このまま僕という存在は終わっていくのか？

そんなの、

「……………なんだよ、これ」
僕が望んだのは、こんな最期おわりじゃない
こんな最期を望んだわけじゃない
あの日記の少年のように意味が欲しかった
輝いたモノが欲しかったんだ
でも僕は間違ってた

本当に欲しかったのはそうじゃない、

欲しかったのは、強い自分だ

あの日記の少年のように、強く生きたかった

強く輝いたように見えたのは、彼の死がちゃんと生き抜いたもの
だったからだ

死ぬことが綺麗思えたのは、彼が自分を生きたから

僕はまだ、生き抜いてない

まだ誰にも、言っていないことだっただけである

触ってもいけないことが、まだたくさん残ってる

僕はつまらないんじゃない

ただ、他人から評価されるだけじゃない

それだけじゃない

僕の幸せはこれからやってくる

そういうことだっただけである

母さんが残してくれたのは、僕に伝えたかったのは、
僕が作れる幸せだっただけとあるってことだ

大丈夫、生きるよ全部

僕もまた、誰かにありがとっつて言ってもらえるような
そんな人になるから………

その瞬間、ガクンと世界が揺れた気がした

その人生期間限定につき

「……………」

ここは、何処だろうか？

僕が瞳を開けると、真っ白な天井が見えた

隣には父さんが、俯くようにして寝ている

微かにピッピッピッという音が、僕の心臓に合わせて鳴っている
のがわかった

身体に力はあまり入らない

微かに動かせた右手を、父さんに触れさせてみた

起きて、父さん

僕の言葉が聴こえたのか、父さんの眼が薄らと開いた

次の瞬間、僕を見て驚いたような顔をする

「、誠！」

父さんはそのまま僕を抱き締めた

痛いよ、と言うよりも早く父さんが泣き出した

僕は初めて、父さんが泣く所を見た気がして、ふと気が付くと微笑んでいる自分がいることに気付いた

僕は、路上で頭から血を流している所を発見されたらしい

三日ほど眠っていたそうだ

意識が回復したのは、驚くくらい稀なことらしい

僕にはその自覚が無く、病院に居ることがいまいちっくりこなかつた

ただ、父さんに聞いても、看護婦さんに聞いても皆口を揃えて言

うのだ

僕が飛び下りたビルなんてどこにも無い、と

いくら僕が自殺しようと思った、と説明しても、信じてもらえなかった

僕は、前方不注意の車に衝突されたのだと言われるだけだった
どうやらその様子を、同級生が見ていたらしく、その子の通報で、僕は一命を取り留めたのだそうだ

では、僕はいつあの少年と会って、
いつあのビルにのぼったのだろうか

屋上で見た母さんは、本当に夢だったのだろうか？
いや、違う

きっと僕に、何かをくれたのだ
期間限定、と言った方が分かりやすいだろうか？
人生を教えてくれたような気がする

きっとあの少年が、僕の命を蘇らせてくれたんじゃないか

そんなことを思いながら、病室のベットの上で笑った

「父さん、今度二人のお墓参りにいこうよ」
驚いたような顔をした父さんの顔を見て、僕はまた笑った

伝えたい言葉があるんだ

「ありがとう」

最終話 彩（後書き）

ここまで読んで下さってありがとうございます
なんとなく、といういつものスタンスで始まった
要は自分の我侭でスタートさせたものだったので、完結させること
ができて嬉しく思っています

お目汚しが大半だったと思います
申し訳ありません

死ぬという言葉は時に酷です
ですが、終わりが在るから輝けるとか、そういうことでもないんじ
やないかなあって思います

嫌なことは、いつか消えます
どんなに苦しいことがあっても、それはいつか全て無くなります
一生着いてまわることがあつたとしても、それを打ち消すような出
会いが必ず来るんです

どんなに嫌なことがあつたとしても、自分から死ぬようなことはあ
つちやいけません
それは絶対です
自分から手を伸ばせば、欲しいものは思ったよりもすぐに近くにあ
るということが見えてくるやもしれません

その人生期間限定につき
この話は、死を考えたあと、生に向かっていくような話になればい
いなあと思って書き進めました
至らない点の方が遥かに多いと思いますが、皆様の心に少しでも残

つたらなと思います

強くなくていい

弱いままでいいから、その先に何か自分の答えを見つけられますように

というのは、自分の願いでもあるわけですが（笑）

ではまた別の作品でお会いできたらいいなと思います

ありがとうございました

広告募集中

小説関連広告に最適です。
出版社や印刷会社はもちろん、
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくはPDF小説ネット広告募集をご覧ください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2055e/>

その人生期間限定につき

2009年3月24日09時36分発行